

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	エルメラ県およびリキサ県のコーヒーの生産性の向上
(2) 事業内容	<p>中間報告の時点では、講義形式のコーヒー圃場リハビリテーション研修と実地研修をエルメラ県レテフォホ郡の3村で行い、リキサ県リキサ郡の1村では講義形式の研修を行った。</p> <p>1. コーヒー圃場リハビリテーション研修 エルメラ県レテフォホ郡ハウプ村（50世帯）、ハトゥガウ村（16世帯）、ドゥクライ村（69世帯）、リキサ県リキサ郡ダルレテ村（33世帯）の4村における、計168世帯（目標の約32%）において実施。</p> <p><u>研修内容</u>：農林水産省が各村に配置している農業普及員が講師を務め、各村の集会場にて以下の内容で講義を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東ティモールコーヒーの課題（生産性の向上、生産量の拡大、品質向上の必要性など） ・コーヒー圃場リハビリテーションの必要性 ・コーヒー圃場リハビリテーション方法の紹介 （古木対策のための台きり・コーヒーの木の植え替え、コーヒー圃場の土壌管理（施肥）、新植のための苗床作り、コーヒーの木の成長に不可欠なシェードツリー（日陰樹）の伐採・植替え・新植など ・コーヒーの木にまつわる病気や害虫の問題とその対応方法 <p>本講義を受けてコーヒー圃場リハビリテーションの重要性をあらためて理解したことで、生産者からは前向きな発言も出たが、なかには台きりをすることにより数年間収入が落ち込むことに懸念を抱く生産者も見られた。</p> <p>なお、本研修を受けた生産者には修了証を発行し、コーヒー圃場リハビリテーションの手法を写真やイラストなどでわかりやすく説明したポスターを作成し、配布した。</p> <p>2. 研修後の聞き取り調査 当初は講義形式の研修後一週間以内に聞き取り調査を実施する予定であったが、上記1.の4村は実地研修対象村でもあるため、講義形式の研修→実地研修→実践での苗床で生育したコーヒーの木及びシェードツリーの圃場への移植という一連の流れのなかで生産者の意識変容を確認した方がよりよい聞き取り調査結果が得られると判断したため、2014年6月から8月の間に行う予定である苗床で生育したコーヒーの木及びシェードツリーの圃場への移植後に聞き取り調査を実施する。</p> <p>3. コーヒー圃場リハビリテーション実地研修 エルメラ県レテフォホ郡ハウプ村（50世帯）、ハトゥガウ村（16世</p>

	<p>帯)、ドゥクライ村(69世帯)の3村における、計135世帯(目標の135%)において実施。当初は講義形式研修の参加者のうち、苗床設置地域近辺在住の方のみ約100世帯を対象にしていたが、これまで当該地域で行われてこなかった住民参加型の苗床作りへの関心の高さから、講義形式研修の参加者全員が参加した。</p> <p><u>研修内容</u>：プログラム・マネージャーと農業普及員の指揮のもと、フィールド・オフィサー4名が講義式研修の生産者を対象に、以下について研修を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・苗床に使用する堆肥づくり ・コーヒーの木を新植するための苗床作り ・コーヒーの木及びシェードツリーの種の育成場の設営 ・発芽した木のポリバッグの移し替え及び苗床への移動 <p>なお、実地研修は、2日間をかけて、苗床作り、植え替えなどの技術研修を想定していたが、苗床作りに必要な竹や堆肥を集める作業など準備段階から生産者と一緒に行うことにより、「研修」ととどまらず、対象生産者がフィールド・オフィサーや農業普及員と共同で準備を行うことにより、本当の意味での実地研修を行うことができた。一方、対象地域であるレテフォホ郡では雨季が例年より早く到来したため、当初予定していた時期に「台きり・コーヒーの木の植え替え」を実施すると台きりした幹に雨が掛かり腐ってしまうため、2014年6月から8月にかけて、収穫の終わった標高の低い地域から実施する予定である。</p> <p>4. 巡回指導</p> <p>プログラム・マネージャーの指揮のもと、フィールド・オフィサー4名が調整し、実地研修対象生産者のグループリーダーが農業普及員の助言も得ながら、実地研修を受けた生産者が管理する苗床において、主に以下の点を確認するための巡回指導を行なった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・苗床の壁や天井のメンテナンス状況 ・育苗場における種子の生育状況 ・ポリバッグに移したコーヒーの木の生育状況 <p>苗床は各村に1箇所ずつ作られており、フィールド・オフィサーは農業普及員と共に、各村において実地研修を受講した生産者へ上記の確認・指導を行っている。</p>
<p>(3) 達成された効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・講義形式のコーヒー園場リハビリテーション研修を受講した計168世帯の生産者に以下の成果がみられた。 ーコーヒー園場リハビリテーションの正しい知識・技術を習得した。 <p>同研修を受講した生産者から「台きりしたコーヒーの木の幹の切り目が東側を向くように切らなければ、幹が腐りやすくなってしまうということは知らなかった」、「コーヒーの実の摘み残しが害虫被害を引き起こすリスクになることがわかり、次の収</p>

	<p>穫期には摘み残しが無いように収穫する」などといった声が聞かれた。</p> <p>ーコーヒー圃場リハビリテーションの緊急性を理解し、リハビリテーションを今行うことが将来の収入保障につながることを認識した。</p> <p>「台きりをすると収入が減るという風にしか考えていなかったが、同研修を受講した結果、コーヒー圃場リハビリテーションをはじめないと、いずれ収穫量が減り収入減につながるということがわかった。」「すぐにでも着手することが将来の収入保障につながるということが知れてよかった。」「コーヒー圃場リハビリテーションでは台きりと並行して新植も行うので少し安心した。」などの声が同研修を受講した生産者からあがった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コーヒー圃場リハビリテーション実地研修を受講した計 135 世帯の生産者に以下の成果がみられた。 <ul style="list-style-type: none"> ー コーヒー圃場リハビリテーションの緊急性を理解し、リハビリテーションを今行うことが将来の収入保障につながることを認識することで、意欲的に苗床作りに取り組んだ。「講義形式の研修で学んだことを実際に圃場で体を動かしながら復習することができた。」「自分の圃場ですぐに活用できる技法が実地研修によってより深く理解できた。」などの声が受講した生産者から聞かれた。 ー グループごとに研修を受講することで対象生産者がお互いに情報共有をする機会がもて、また、まとまりをもって苗床作りに取り組んだ。 ー 4～5 年後にコーヒーの生産性向上をもたらすように、コーヒーの木及びシェードツリーの苗床作成方法を含む育成方法を習得した。 ・ 苗床に植えたコーヒーの木の数約 10,000 本 ・ 苗床に植えたシェードツリーの数約 4,000 本 ・ 直接裨益者のべ数：303 世帯（目標の約 49%） （講義形式および実地研修受講世帯数） ・ 間接裨益者のべ数：約 2,120 名（目標の約 49%）（直接裨益者世帯構成人数）
<p>(4) 今後の見通し</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義形式のコーヒー圃場リハビリテーション研修 残り 4 村においても、コーヒー収穫が本格化する 2014 年 5 月までに講義形式の研修を行う予定である。 2. リキサ県リキサ郡ダルレテ村でのコーヒー圃場リハビリテーション実地研修 今期の雨季では豪雨が続き、悪路の影響で車両でのアクセスが困難なため、雨が弱まる 2014 年 3 月を目途に同村での実地研修を予定している。なお、同村では講義形式の参加者及び農水省の農業

普及員からコーヒーの木の新植よりシェードツリーの新植を優先したいという希望が出たため、シェードツリーの苗床作りを主に実施する予定である。

3. エルメラ県レテフォホ郡における育成中のコーヒーの木及びシェードツリーの圃場への移植

現在苗床で育成しているコーヒーの木及びシェードツリーは、2014年6月から8月の間に、実地研修を受講した生産者の圃場へ移し替える予定である。

4. エルメラ県レテフォホ郡の3村における台きり研修

コーヒー収穫期である2014年6月から8月の間に、収穫が終わった標高の低い地域から順次行うこととする。

5. 研修後聞き取り調査

実地研修対象村での講義形式研修後の聞き取り調査は、講義形式の研修→実地研修→実践の中での生産者の意識変容を確認するため、苗床で生育したコーヒーの木及びシェードツリーの圃場への移植をした後に行う。一方、講義形式の研修のみを行う残り4村での聞き取り調査については、予定通り研修後1週間以内に行う。